

# 小川文学の軌跡とこれから

## ブックフェア・ガイドブック



書評系 YouTuber  
渡辺祐真 (スケザネ)

✿  
presents

田畑書店



田畑書店

〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-2-2 森ビル 5階  
電話 03-6272-5718 / FAX 03-3261-2263  
<http://www.tabatashoten.co.jp> / e-mail : [info@tabatashoten.co.jp](mailto:info@tabatashoten.co.jp)

## 目次

前口上

1

### ●小川洋子の世界●

なぜ人は物語を求めるのか？

——小川洋子と学ぶ「読書の極意」

2

「小川洋子の軌跡とこれから」を振り返って

——小川洋子と学ぶ「創作の極意」

10

——ブックフェアに寄せる選書リスト

〈選書①〉小川洋子の作品たち

16

〈選書②〉小川洋子の本棚

21

〈選書③〉小川洋子を通して世界を広げてみる

25

『小川洋子のつくり方』ブックフェア選書リスト

31

### 《前口上》

はじめまして。渡辺祐真（スケザネ）と申します。私はシナリオライターとして働いたわら、様々な媒体で、書評やトークイベントなど書籍にまつわる発信を行っています。

そんな活動からご縁がつながり、『小川洋子のつくり方』（田畑書店）という書籍の刊行を記念して、「小川文学の軌跡とこれから」と題した一連のイベントに参加しています。ご存知の方も多いと思いますが、小川洋子さんは『博士の愛した数式』や『ことり』といった作品で知られる、日本のみならず世界を代表する小説家です。

今回はそんな小川さんにまつわるブックフェアとして、私が本を選び、紹介文を作成しました。

本冊子には三つの文章が収録されています。まず、小川さんによる物語論を通して、物語を読むことの意味を考えた「なぜ人は物語を求めるのか？」。更に、小川さんとのイベントを振り返りながら、小川さんの創作の秘密を探った「小川文学の軌跡とこれから」を振り返って。そして、ブックフェア用に選んだ書籍すべての紹介文です。

本冊子が、小川洋子さんの作品世界、果ては文学全体を知りたいと願う全ての人の鍵となることを祈っています。

表紙イラスト（スケザネ）：©杏仁

## なぜ人は物語を求めめるのか？——小川洋子と学ぶ「読書の極意」

### ①はじめに

まず個人的な話から始めさせていただきます。私は今こうして文学にまつわる発信をしています。その原点は小説家の小川洋子さんです。小川さんの『物語の役割』（ちくまプリマリー新書 二〇〇七年）という物語の力や役割を説いた本を読んだからこそ、文学を志し、文学部に進み、そして今でも文芸書を読んでいるといっても過言ではありません。小川さんの物語論を読むと、物語ってこんなに凄いんだ！ こんな力があるんだ！ ということを教えてもらえますし、猛烈に文学が読みたくなる。そして文学を信じられるようになります。

小川洋子さんの物語観の底には、「人はなぜ物語を求めめるのか」という問いがあります。

『物語の役割』では、そのための手がかりとして、ノンフィクション作家の柳田邦男さんの『犠牲——わが息子・脳死の11日』（文春文庫 一九九六年）という本から、柳田さんの息子（洋二郎）さんが自殺をされた時の話が紹介されます。懸命に生きた息子さんは、残念ながら自ら命を絶ってしまいます。しかし、息子さんが他者への強い思いやりの心を持っていたことを知った柳田さんは、息子さんの腎臓を移植することを決意します。その腎臓が飛行機に乗って他国へ行く様子を見て、柳田さんは息子の命が引き継がれていくようだと感じたのです。

そのことを小川さんは、こう表現します。

現実の洋二郎君は死んだけれども、事実を受け入れるために、「引き継がれた命が星のなかを運ばれていく」というフィクションを、柳田さんが自分の中で組み立てなおしているわけです。 『物語の役割』

つまり、単純に考えれば、ただ腎臓が運ばれていくだけなんです。そこに息子の命が引き継がれる、という物語を見る。それによって柳田さんは息子を失ったという事実を、理解しようとしたんだと指摘します。

現実をどうにかして受け入れられる形に転換して行く、その働きが、私は物語であると思うのです。 『物語の役割』

現実がとても辛いものと、人間はそのまま受け止め切れない。だから、それを物語に変形する。卑近な例で言えば、失恋した時に、自分がかわいそうだとか、悲劇のように仕立てる。そういうものも、物語に仕立てる例の一つでしょう。つまり、小川さんは、物語というのは誰しもが持っている、人間が必要としている能力なんだと言います。

『小川洋子のつくり方』（田畑書店 二〇二一年）では、こんな風にも説明されます。

体験したことを物語にできないと、それは苦しいですね。たとえば究極の苦しみを味わった人は、それを物語にできないから苦しいんだと思うんです。大事な人が死んで、二度と帰ってこないという現実を、そのまま記憶しておけと言われたら、耐えられないですね。ですから「あの子はいま鳥になって、どこかの空を飛んでいるんだ」というような（中略）理屈に合わない、そんなことあるはずはない、という物語にした時、初めてどうにか心の中に収めておくことができる。

ですから小説を書くことは、人間の記憶を探るということです。 『小川洋子のつくり方』

物語を見出す力は誰しもが持っている。柳田さんが息子さんを亡くされた時の思いも、恋愛の例も、亡くなってしまった人が鳥になるという話も、全て現実の中にある話です。だから小川さんは、物語とは作家の頭から生まれるのではなく、現実の中に隠れているのだと言います。そのことを、こんな比喻で表現されます。「作家も現実の中にすでにあるけれども、言葉にされない為に気づかれないで居る物語を見つけたし、鉱石を掘り起こすようにスコップで一生懸命掘り出して、それに言葉を与えるのです」 『物語

の役割」)

既に存在しているのに、誰も見つけていないもの。それを鉱石を掘りだすように見つけだし、言葉を与えてあげた。それが作家の役割だということです。

したがって、「自分が(物語を)うまく書いてやろう」、「私の個性を見る」とか、そういう能動的な行為ではない。謙虚な気持ちで、どこかに眠っている物語を探そう。そのために現実をじっくりと観察するというのが作家の仕事なんだ、というのが小川さんの物語観です。

### ③職人としての作家…作家は人類の最後尾にいる

以上見てきた通り、小川さんは、人間のどんな営みの中にも物語はある、むしろ人間はどうしても物語を求めてしまふものだ。だからこそ、作家というのは、そういった現実の中にすでにあるものから、物語を見つかる。観察して、それに言葉を与えるものなんだ、と言います。それを踏まえて、「職人としての作家」という話に移りたいと思います。

再び『物語の役割』から引用します。

ストーリーは自然に発生してくるもので、むしろ自分が書こうとしている、まだ書かれていない物語が、すでにストーリーを持っているわけです、ストーリーは作家が

トリーを内包している、作家はそれを追うのだというのだという感覚とすごく近いと思います。

また別の例ですが、批評家小林秀雄と数学者岡潔の対談を収めた『人間の建設』という本があります。この中で、小林と岡は近年の芸術家について手厳しく批判をするのです。

岡…自我が強くなければ個性は出ない、個性の働きを持たなければ芸術品はつくれない、と考えていろいろやっていることは、いま日本も世界もそうです。いい絵がだんだんかなくなっている原因の一つだと思います。小林…いまの絵かきは自分を主張して、物をかくことをしないから、それが不愉快なんだな。物をかかなくなると、自分の考えたことか自分の勝手な夢をかくようになった。 『人間の建設』新潮文庫 二〇一〇年

つまり、最近の芸術家というのは個性ばかり主張する。芸術家というのは個性を競うものではないのだ、と言うのです。芸術って個性を發揮するものじゃないの？と思うかもしれません。私もそう思いました。

しかし二人が言いたいのは、芸術家は、個性を全面に押し出すのではなく、描くべき対象をじっくり見たり、素材を丹念に生かしたりすることが肝要であると。言い換えれば、自分を前面に出すのではなくて、目の前にある対象・

考えるものではなくて、実はすでにあって、それを逃さないようにキャッチするのが作家の役目である。すでに物語自身を持っているストーリーを逃さず受け止めようという姿勢で、私は書くように努力しています。

どういふことかという、作家がストーリーを駆動させるのではなくて、物語が既にストーリーを孕んでいる。だから、作家というのはそれを追っていかばいい。ですから、自分でこんな話にしてやろうとか面白がらせてやろうといった能動的な態度ではなくて、物語が初めから持っているエネルギーみたいなものを尊重してあげて、それを追っていくのが作家の仕事だと言うわけです。

ここで思い出すのが、運慶という、平安末期から鎌倉時代に活躍した仏師(仏像を彫る職人)です。夏目漱石『夢十夜』という作品では、運慶の仕事ぶりが次のように評されます。

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ」

仏像を彫るときには、その元となる木があって、それをうまく掘って仏の形にしていくと普通は思いますよね。でも、そうじゃないんだと。運慶というのは、すでに木の中に埋まっている仏像を彫り出すんだということです。まさに先ほどの小川さんの話と一緒に、もうすでに物語がそのス

素材を尊重するのが第一だ。だから、自分を主張するな、自分の個性を出すなど言っているんです。これも、埋まっている仏を掘り出す運慶と同じと行っていいでしょう。

やっと小川さんの話に戻ります。先に小川さんがストーリーは初めからあるという話をしていましたが、関連する別の文章も見てみましょう。運慶や『人間の建設』の例を念頭に置けば、より一層腑に落ちるはずですよ。

伏線を張って、それが展開していった、どこかでそれが回収されて腑に落ちる。ああ、そういうことだったのかと納得できる。結果をもたらした原因がはっきり分かるという小説はたくさんあります。そういう小説は、書いていてとても安心なんです。ピタッと着地できる感覚がありますから。それらは読んでいても書いていても安堵できる小説です。そういう小説の中にも素晴らしいものはたくさんあります。けれども、文学の本質はそういうところにあるのかな、というと、どうも違うんじゃないか、むしろその逆のところにあるんじゃないかな、と思うんです。原因や理由が分からないからこそ、物語が必要なんじゃないか。理屈で説明がつかないものを見捨てないで掬い上げる。それが文学なんじゃないかな。

〔小川洋子のつくり方〕

小川さんの主張を整理します。物語はすでに現実にあ

る。だから、それを見つめる、観察するのが作家の仕事である。そして、作家の個性や明快な因果関係みたいなもので物語を駆動させるべきではない、と言っているのです。それはまさに運慶が木の中から仏を掘り出そうとした態度、小林や岡が個性を批判した態度、それらと全部繋がっていると思うのです。つまり、作家というのは、面白がらせてやろう、こんな風に自分の個性を發揮してやろうというのではない。謙虚な気持ちをもって、現実を観察する、じっくりじっくり追っていくべきだと言っているのだと思います。

これは実に「職人」的な態度です。芸術家が自分の個性を競い、それが渴望されるようになったのは、近世から近代にかけてのことです。それより前は、職人と呼ばれる人々が、自分の個性をいたずらに發揮せず、自分の名前すら残さず、自分の職分、規矩、規範を守って仕事をしていった。そういう人々が芸術(的なもの)を担っていたと思います。

実際、小川さんの小説の中にはこういった職人的な人が登場します。『やさしい訴え』にはチェンバロ職人が出てきますし、『ことり』では小鳥の飼育員(のような人)が出てきます。他にも、日常の些事みたいな仕事を、それ以上やったらちょっとうるさいし、それ以下だと足りないという絶妙な塩梅でこなす人がたくさん登場します。それは、フィクション以外の文章でも同様です。『そこに工場

大切な存在が既に失われてしまった世界が舞台になっていきます。いずれの作品も、何かを失ってしまった人たちが、その喪失があるがままに大切に受け入れて、ほかの人たちと協力しながら生きていくというのが、ストーリーの核を成しています。

それは小川さんの小説観と響き合うと考えています。次の文章をご覧ください。

小説を書いているときに、ときどき自分は人類、人間たちのいちばん後方を歩いているなという感触を持つことがあります。人間が山登りをしていけるとすると、そのリーダーとなって先頭に立っている人がいて、作家という役割の人間は最後尾を歩いている。先を歩いている人たちが、人知れず落としていったもの、こぼれ落ちたもの、そんなものを拾い集めて、落とした本人さえ、そんなものを自分が持っていたと気づいてないような落とし物を拾い集めて、でもそれが確かにこの世に存在したんだという印を残すために小説の形にしている。そういう気がします。『物語の役割』

つまり小説家は、人類という隊列があった場合に一番後ろにいる人だというふうに言っているのですね。一番後ろにいると、前にいるすべての人が見渡せます。小学校や幼稚園の遠足の隊列を思い起こしてみてください。先頭には

がある限り』という工場の職人の方へのインタビュー集では、職人たちを愛おしむように、敬意を持って描いています。

小川さんの創作態度、作中人物の造型、小川さんの興味の範囲、そして小川さんの物語観、それらすべてを「職人」という概念がつかないでいるように感じるので。

#### ④ケアとしての物語：物語と人にじっくりと向き合うことの意味

先の章では、職人の話をしました。ここでは、職人というのは己の分を守るものだという点を強調しましたが、もう一つ重要な側面として、職人はギルドという集団を形成し、職人同士で助け合うということがあります。それぞれの領分をちゃんと守りながら、力を合わせるべきところは協力しあう。『ブラフマンの埋葬』では、正に「創作者の家」という、芸術家たちが共同生活を営む不思議な家が登場しました。

小川さんの作品でも『助け合い』というのは、とても重要な概念です。なぜかと言えば、ほとんどの小川さんの小説では、病气、何かの喪失や欠損が描かれるからです。

病气は、デビュー作の『完璧な病室』からの重要なテーマです。『密やかな結晶』では記憶が失われていく様子が描かれました。『小箱』では、物語のはじまりから、ある

担任の先生がいます。担任は、あそこへ行こう、次はあっちへ行こうと先導して引っ張っていつてくれる、基本的に後ろは振り返りません。一方で、最後尾にいるのは、副担任の先生、あるいは保健の先生です。彼らは先導することではなく、ついていくだけ。でも、後ろにいるからこそ、あの子転んじゃったとか、あの子は輪に入れてないなというのが全部見えるのです。そして、一番歩みの遅い子に歩調を合わせてあげながら、そういった色々なトラブルをサポートする。小川さんの言う作家とは、正にこういう副担任のような存在ではないでしょうか。

ここでキーワードになるのが「ケア」です。ケアという概念は近年、特に人文学界隈でも話題になっていてキーワードなのでご存知の方も多いかもかもしれません。遡るとキャロル・ギリガンというアメリカの倫理学者が重視した概念です。

人間関係の真理は、やはり立ちもどって、人との関係を再発見すること、つまり、自分も他人も相互依存の関係にあり、人生は、どんなにそれ自体価値があるにせよ、人間関係のなかでの心くばり(※ケア)によってのみ維持されるのだと実感することにあります。

『もうひとつの声』(キャロル・ギリガン著/岩男寿美子監訳 川島書店、一九八六年)〈括弧は引用者による〉

ケアとは、心くぼりや配慮、優しさなど、他者との関係を重んじる行為です。これまで、弱さを克服して自分ひとりでなんとかしようとか、自立や自己責任ということばかりが強調されてきました。しかし、弱さを持ったまま、ほかの人と協力しながら生きていくことも素晴らしいんじゃないか。自分の中にある弱さを無理に克服せず、あるがまま受け入れて、他者と相互に協力して生きていく。それが「ケアの倫理」が大事にしている考え方なのです。

先ごろ刊行された、小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社 二〇二一年）という本は、そのケアと、ウルフや三島由紀夫、平野啓一郎などの作家の文学作品とを結びつける興味深い試みです。

その本の中で、ケアの鍵となる概念として、「相手の気持ちや感情に寄り添いながらも、分かった気にならない」状態である「ネガティブ・ケイパビリティ」を挙げています。この即断をしない態度こそが、ケアにも、そして物語にも必要だと説くのです。

他者の言葉を聴こう、他者の気持ちを理解しようとすることは忍耐力が必要であるという点で、文学の営為にも通じる。物語を創作すること、あるいは読むことは、誰かの経験に裏打ちされた想像世界に向き合い、じっくり考えて耐え抜くプロセスでもある。

（小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』）

名前も知らない誰かの痛みに共感できる。あるいは、取り返しのつかない過ちを犯してしまう人間の、愚かさの影が、自らの内にも潜んでいないか、じっと目を凝らすことができるのだ。

（『小川洋子のつくり方』）

文学とは他者に想いを馳せる非論理的な行為である、という話は、『ケアの倫理とエンパワメント』の「誰かの経験に裏打ちされた想像世界に向き合」うという話と響き合います。そして、小川作品の中には何かを喪失してしまった人や失われつつあるものがよく描かれる。そういった喪失をどう引き受け、他者と協力しあって生きるか。そのテーマは、文学というものが持っている営みと極めて近いものだと思います。文学自体がまさにそういう営みであり、そして多くの小川作品では、そういう苦しみや喪失が描かれる。そしてそれを貫いているのは、他者への思いにじっくりと向き合う態度（ケア）なのではないでしょうか。

## ⑤ 小川さん

小川さんによれば、人は現実を受け入れるために、物語という形式を用いる。だから、誰にとっても物語は必要である。同時に、物語とは作家の空想や妄想ではなく、現実の中に既にあるものである。したがって、現実をきちんと

現実世界における他者との対話は大変手間のかかる行為です。自分とは全く異なる生身の他者とじっくりと向き合い、寄り添い、その人について考え抜く必要がある。その態度こそがまさにケアの重要な態度だと思えます。

そしてそれは物語でも同様です。忘れられがちなことですが、物語を読むというのは、すごく手間のかかる行為です。登場人物の気持ちや出自、置かれている状況、周りの人物たちとの関係、言葉の美しさや関連する他の文学作品など、様々なことに気を配る必要があります。それを一言で表せば「作品との対話」でしょう。

物語とは対話である、ということを押さえて、本題に戻りたいと思います。小川洋子さんは物語の力の源について、次のように書いています。

自分が生まれる前、遠いどこかで起こった無関係なはずの事実を、単に知識として得るだけでなく、直接の体験と同様に自らに刻み込み、記憶の小舟に載せて次の世代につなげてゆく。この困難を乗り越えるためには、政治や学問の助けだけでは足りない。なぜなら、他人の記憶を共有するなど、全く非論理的な足掻きだからだ。

ここで文学の力が求められる。理屈から自由になり、矛盾を受け止める必要に迫られた時、人は自然と文学に心を寄せるようになる。文学の言葉を借りてようやく、

観察すれば、そここに物語は存在しており、それを掬い取ってあげるのが作家の役割である。

ただし、小川さんは作家の役割についてきわめて謙虚に捉えています。作家は現実と物語を、謙虚なまなざしで見つめるべきで、そうすればストーリーはおのずと展開していく。ちょうど職人のように自分の規矩を守って、丹念に作っていくべきである。それは小川作品に登場する多くの人物を貫く職人性そのものでもあります。

小川さんの考える物語の力とは、非論理的な壁を超えられるものです。他者と記憶を共有できたりとか、自分や他人の弱さをそのまま受け容れながら、お互い支え合うことができる。小川さんはそういう思いで作品を紡ぎ、実際に小川作品にはそういう力が秘められている。だから小川洋子さんの文章を読むと、物語に救われるし、よし、もう一回物語のことを信じてみよう。いっぱい物語を読もう、間違いないという気持ちにさせてもらえます。

みなさんもぜひ小川さんを通して、たくさん物語に触れてみてください。

## 「小川文学の軌跡とこれから」を振り返って——小川洋子と学ぶ「創作の極意」

### ①はじめに

「作家にとって大事な能力は、待つという苦行に耐えられること」。作家の資質について問われた時、小川洋子さんの口から発せられた言葉です。その言葉を体現するように、会場からの発言にじっと耳を傾け、それから慎重に言葉を紡ぐ小川さんの姿が印象的でした。転じて、小川さんの作品を思い起こしても、忍耐強く、丁寧に作業を行う人物がとて多く登場します。

これは偶然なのでしょうか？ あるいは、何か意味があるのでしょうか？

その秘密を探りつつ、小川さんのイベントを振り返ってみたいと思います。

### ②小川文学の軌跡とこれから

#### 第一部：編集者と読む小川洋子

二〇二一年九月十一日（土）、東京都江戸川区平井にある書店〈平井の本棚〉にて、トークイベント「第6回本の作り手と読む読書会〜小川文学の軌跡とこれから〜」が開催されました。登壇者は、小川さんの最初の担当編集者であり、現田畑書店代表の大槻慎二さん、私、そして小川洋子さんご本人。

九月十一日といえば、六時間二十六分に亘った、日本で一番長い試合と呼ばれる、阪神対ヤクルト戦が行われた日。それはすなわち、『博士の愛した数式』のクライマックスでもありません。ただの偶然なのですが、私はそんな奇縁に思いを巡らせながら、イベントに臨みました。

イベントの第一部は、「編集者と語る小川洋子」と題して、大槻さんと私が登壇。大槻さんはかつて文芸雑誌「海燕」や「小説トリッパー」、朝日文庫で編集に携わり、小川洋子さん以外にも、小川国夫氏や佐伯一麦氏、角田光代氏、丸山健二氏など、錚々たる作家たちの作品を手掛けた、辣腕の編集者です。そんな顔ぶれから推し量れる通り、大槻さんは実直で誠実な方です。小川さんもかつてこんな風に評されました。「わたしの小説に対するこういう考えを一番深く理解してくれているのは、福武書店のOさんだ。彼は、わたしについてくれた最初の編集者ということで、なかなか意味深い人物である。」（『冷めない紅茶』とあいまいさと編集者）

イベントは、大槻さんと小川さんとをめぐる数奇なご縁や、涙を誘われる出版文化の盛衰にまつわるごぼれ話からゆっくりと幕を開けました。その中でも特に印象的だったのは、小川さんの海外での受容にまつわる話です。大槻さんは、小川文学の大きな特徴の一つを『アンネの日記』との関係に見ると言います。

小川さんの作品世界の根底にアンネの日記、ホロコーストがあります。これは世界共通のある一つの価値観を示している。もちろん、ホロコーストやアウシュビッツに言及している日本の作家も数知れずいて、例えば、それをサルトル的立場からアプローチすれば大江健三郎。

そして、小川さんの場合は、様々な読書体験からほぼ一歩化していると思います。

作家が戦争について語る時、いくつかの態度があるでしょう。反戦的な色合いを出す作風、原民喜や林京子のような被災者に焦点をあてた作風、大岡昇平や梅崎春夫のような戦地での体験を基盤にした作風など、例をあげていけば枚挙にいとまがありません。

そんな中で、小川さんがご自身の立場を明確に言い切った文章を紹介します。

アンネを語ろうとすれば、当然ナチス・ドイツや人種差別問題やホロコーストについて考えなければならぬだろう。けれど私が本当に知りたいのは、一人の人間が死ぬ、殺される、ということについてだ。歴史や国家や民族を通してではなく、一人の人間を通して真実を見たののだ。

（『アンネ・フランクの記憶』角川文庫 二〇一三年）

中学時代に『アンネの日記』を愛読したという小川さんは、『アンネの日記』を戦争文学や何よりも、一人の少女の繊細な日記として読んだといいます。だからこそ、ナチスやアウシュビッツはもちろん重視されていますが、前に来るのはアンネ・フランクその人なのです。

制度や時代、集団といった大きなものよりも、一人の人間、個人を大事にする態度は、小川洋子という作家を貫く重要な視点であり、『アンネの日記』にまつわるこの一連の話はその好例であるように思います。そして、その態度のみならず、大槻さんの指摘するようにテーマ的にもヨーロッパとの親和性が高く、小川作品が世界で受け入れられている大きな要因の一つになっているのではないでしょうか。

小川さんの秘密に近づく端緒が提示されたところで、第一部は幕を閉じました。

### ③小川文学の軌跡とこれから

#### 第一部：作家と読む小川洋子

続く第二部では、「作家と読む小川洋子」と題して、小川洋子さんも登場されました。コロナ禍のため、Zoomを用いた遠隔での対面です。事前に質問事項は練り上げていきましたが、実際その通りにはほとんど進行しないうと覚悟していたところ、果たしてその通りになりました。それどころか、私が一方的に質問をして、小川さんに答えていただくという形式ではなく、私の問いかけに小川さんが答えてくださり、それに対して私が一言添えると、さらにそれに対して小川さんが続ける、という対話に近い形になったことも予想外の出来事でした。

それは結果として嬉しい誤算となりました。自分の中で

忙しく、実利的になればなるほど、彼らのような人々の声は無視され、聞こえなくなってしまう。これは『ことり』や『琥珀のまたたき』といった作品に代表されるでしょう。

更に、自分の規矩を守り、実直に仕事をしているため、「わざわざ自分の仕事について声高に叫ばない人々」。これは職人的な人々で、『やさしい訴え』のチェンバロ職人、『密やかな結晶』のおじいさんなどがその好例です。

こうしてみると、声を発せない人々の声を拾うという作家自身と、声を発せない作中人物たちというのは、見事に直結しています。

とはいえ、声を拾い、それを描くといっても、具体的にどう思うのか、どうやってその人々を描写すればいいのか。それにまつわる小川さんの発言を振り返ります。

小説の中に登場する人物を描写するために、いったい何を描写するのか、どういう風な人間として書くのか、かかっているのは大変重要な問題です。それはどういう会社か、勤めてるかとか、身長が何センチあるとか、かかっていることでは全然伝わらなくて。麦とろろ飯を三杯食べるとか、メガネがいつも指紋で汚れているとか、そういうことですか、人間というものは伝わらないんじゃないかと思うんですね。

この発言について私は、人物を描写するために、その人

はバラバラだった質問事項が一繋がりになり、それが小川さんを貫くテーマをあぶりだしていったように思うのです。

結論から申せば、そのテーマとはずばり、「大きな声を発せない人々の声に、懸命に耳を澄ませる」という小川さんの創作態度です。それこそが小川さんの軸となっているのではないかと感じました。そのことを特に意識させられたのは、私が「小川さんの作品では、無名の人物こそ真実を語ることが多いと感じる」という話をした時です。それに対して、小川さんはこう続けられました。

作家は、大事な事を言いたくても言えないで、黙っている人のそばに行く。その人の口元に耳をくっつけるようにして、無いことにされていることこそ聞き取らないと（いけない）。そのために、小説があるんじゃないかと言う風に思いますけどね。

「大きな声を発せない人々」については、様々な意味が含まれていると思います。

まずは、「死者」です。死んでしまった人はもう声を発することができません。特に戦争や自然災害といった外的な要因によって亡くなった人。これは『小箱』や『沈黙博物館』といった作品で描かれています。

次に、「子供や障害者」など、発言力が弱い人々。世界が

の社会的地位や外面から迫るのではなく、その人の内面が滲みでているものを書くべきだという意味に受け止めます。

ここで思い出した文章があります。二十世紀を代表するイギリスの作家、ヴァージニア・ウルフの『ベネット氏とブラウン夫人』という創作論です。その中でウルフは、作家が人物を描く際にどのように描くべきかを論じています。

ウルフは次のように問いかけます。今、電車に乗っていて、目の前には、老夫婦がいる。仮に名前をブラウン夫人としよう。このブラウン夫人を、どのように描写すべきか、と。

ウルフは例として、彼女より少し前の時代に活躍した、アーノルド・ベネットという作家ならどう書くかを再現してみせます。ベネットならば、ブラウン夫人が乗っている列車の行き先や種類、同乗している人々といった外面的な要素を固めてから、やっとブラウン夫人自身に言及をはじめらうと喝破します。

しかし、ウルフはそうあるべきではないと断言します。ウルフは、ブラウン夫人自身を見つめることを力説するのです。

大事なことは彼女の性格を理解すること、彼女の雰囲気（中略）  
気にひたることでした。



ここに他人にぐいぐい迫ってくる一つの性格があるという事。ここにブラウン夫人がいて、他人にほとんど自動的に自分についての小説を書き始めるように仕向けているという事です。すべての小説は向いの隅に坐っている老婦人から始まる、と私は信じます。私は信じます、すべての小説は少なくとも性格を取り扱っているという事を、小説という、ぎこちなく冗長で、劇的ではないけれど一方では豊かで、弾力性があり生き生きとした形式が徐々に発展してきたのは、性格を表現するためであって、主義主張を説くためでも、歌をうたうためでも、あるいは英帝国の栄光を祝うためでもないという事とを。

(ヴァージニア・ウルフ著／朱牟田房子訳『ヴァージニア・ウルフ著作集7』みすず書房 一九七六年)

ウルフのブラウン夫人論と小川さんの創作論は似ています。どちらも、個人をじっくりと見つめることが鍵になっているのです。『アンネ・フランクの記憶』に書かれている「一人の人間を通して真実を見たい」という言葉、そして一人一人に寄り添って声を聞こうとする態度を、もう一度思い起こしてください。

つまり、小川さんの根幹にあるのは、声なき声に耳を澄ませたいという思いであり、結果としてそれが、創作論や技術論などと分かちがたく結びついているのだと感じま

#### ④「小川文学の軌跡とこれから」を振り返って

以上、イベントでの小川さんの発言を中心に、小川さんがどのように物語と向き合い、創作をしてきたのかについて思いを巡らせてみました。イベントの雰囲気の一部や、小川さんのエッセンスの一滴でも伝われば幸いです。

改めてなんと贅沢な時間だったことかと胸がいっぱいになります。一部、二部あわせて、およそ二時間半、私のどんな話にも応答してください、参加者の方からのご質問にもほとんどすべてお答えいただきました。

数えきれないほどの発見と感動があり、なんとそれは最後の一言に至るまで続きました。最後に締めくくったのは、小川さんの「また、本の中でお会いしましょう」という粋なご挨拶でした。確かに最近、なかなか人と会いづらいのは事実です。しかし、我々には本があります。小川さんの挨拶の通り、本を読むことで、我々は遠く離れていても会うことができるんだ、とハッと気づかされました。

そういえば、小川さんの作品に登場する、声なき人々の多くも、よく本や図鑑を読んでいます。小川さんが本を読むという行為に託した思いは、単なる挨拶に留まらないのではないか。そんなことを考えていたら、ふと最初の質問に対する回答が蘇ってきました。

私が「海外の読者には、日本の読者と比べて何か特徴が

す。そこには時代も、国境も関係ない。難しい思想や理論も要らない。

ただし、大事なことが一つだけあります。それが小説の題材についての次の言葉です。

自分で（小説の）材料を無理やり組み合わせ、小説にしようとする、失敗するんですよね。思いもかけない方向から何か突然やってきて、それをパッとキャッチする。それが小説に何の役割を果たすのかその時点では全然分からない。でも、それが分かってくるまで待つ。待っていると、自ずと全く無関係だと思っていた要素が、自分が持っていた材料とパッと結びつく瞬間があつて、思いもよらないものに変化する。それは自分がピーカーをかき混ぜて、変化させたんじゃない、彼らが勝手に結びついて変化したっていう風に思えるような作用が起こる。

だから、作家にとって大事な能力は、待つという苦行に耐えられること。忍耐強さ、執念深さにあると思いませんね。

そう、忍耐が必要なのです。粘り強く、相手が心を聞き、言葉を紡いでくれるのを待つ。そうすればやがて声が聞こえてくる、それを確かに聞き取り、描くのが作家なのではないでしょうか。

ありますか」と尋ねたときの回答です。

フランスやアメリカのインタビュアーは、あなたの登場人物たちはなぜ抵抗しないのかとよく聞きます。なんで現状をこんなに黙って素直に受け入れてしまっているんだ、抵抗して現状を打破しようとしななんだっていうことを聞かれることがあつて。

（そういう質問に対して、どう答えるのかを問われて）武器を持って戦うことが、抵抗とは限らない。無言で受け入れて、自分の中で消化することも一つの抵抗だと私は思うと答えますね。そういう風にして『密やかな結晶』の登場人物たちは島の中でどうにか自分の人生を生きているわけだし、『琥珀のまたたき』の子供たちもあの閉じ込められた中で、ちゃんと成長していく方法を見つかる。

現状を受け止めるっていうところからでもスタートできる。そういうことを書いてある小説のつもりなんですけどね。

本を読むことは、とても強い行動なのです。本を読む。そして、そこに眠る声なき声に耳を澄ませよう。声が聞こえたら、真剣に耳を傾け、それを文章に綴るのだ。それが私にできる「抵抗」なのかもしれない、そんなことを考えながら、会場を後にしたのでした。

〈選書①〉

# 小川洋子の作品たち

日本のみならず、世界中で愛される小川洋子の作品たち。本コーナーでは、小川さんの小説、エッセイ、対談などから、特に私がイチオシしたいものを選び、紹介します。懐の深い作品ばかりなので、文学を読み慣れない人にも、読み慣れた人にも、絶対響くものがあるはずです。

## 『小川洋子のつくり方』

(田畑書店)

小川洋子は、いかにして小川洋子となり、いかにして小川洋子であるか

初代本屋大賞と読売文学賞を受賞した『博士の愛した数式』、ブッカー国際賞にノミネートされた『密やかな結晶』、そして『ひとり』や『ブラフマンの埋葬』など、数々の名作を送り出

し、更には数多の名エッセイを綴り、科学者をはじめとした多彩な顔ぶれとの対話を重ねる小川洋子。本書は、そんな小川洋子を多角的に捉えた初の単行本である。ニューヨーク・タイムズ誌に掲載されたエッセイ、海外での受容のさ

方、世界各国での講演録、千野帽子・堀江敏幸との対談、そして全小川作品の解説など、盛りだくさんの内容である。

小川洋子を知っている人はもちろん、知らずとも、物語や丁寧に生きることに対して興味がある人には、ぜひ手にとってほしい。

## 『密やかな結晶』

(講談社文庫)

気づいたときには、もう失われている

物語の舞台となる島では、徐々に記憶が失われていく。昨日まで普通に存在していた物に対して、突如、人々は理解できなくなり、島から無くしてしまふ。それは暴力的な奪取のようでもあり、歴史の進歩に伴う欠落のようでもあり……。ブッカー国際賞にノミネートされ、世界中で読まれる小川洋子の代表作。

## 『アンネ・フランクの記憶』

(角川文庫)

歴史や民族ではなく、一人の人間を通

して真実を求める

小川洋子は自分の創作の原点を、中学時代に読んだ『アンネの日記』だと語る。そんな十代から続けてきた、『アンネの日記』との対話が結実したのが本書だ。主眼にあるのは、ナチスやホロコーストといった集団や歴史ではなく、アンネ・フランクその人。私は、一人の人間を通して真実を見ようとする、文学の根源的な態度を本書から教えてもらった。

## 『やさしい訴え』

(文春文庫)

嫉妬や三角関係に悩むあなたに

夫との関係に悩んだ「わたし」は、山奥の別荘地へと一人引越す。そこで、チェンバロ職人の男とその女弟子との交流が始まる。やがてわたしは男に惹かれていくが、三人がそれぞれに取返ししのつかない喪失を抱えている

ことが明らかに……。言葉の端々に駆け引きが織り込まれながらも、気遣いと配慮が行き届いた、「折り目正しい嫉妬」が描かれた物語。

## 『琥珀のまたたき』

(講談社文庫)

監禁された三人の子供たちは、凶鑑を手に見る

呪いを恐れた母親によって、三人のきょうだいは閉ざされた別荘で暮らすことを強いられる。外界と一切遮断された三人が夢中になるのは、別荘に所蔵された浩瀚な凶鑑。凶鑑を通して、世界や死者とも対話を重ね、やがてその生活に綻びが生じていく。崩壊が予見されながらも、鉱石のように美しいサスペンス。

## 『ひとり』

(朝日文庫)

80分しか記憶が続かない元数学者「博士」のもとで働くことになった、家政婦の「私」。80分という限られた時間を繰り返しながら、無限で普遍的な数学を頼りに交流を重ねていく。随所

人間の言葉が話せず、小鳥とだけ会話できる兄と、その兄の言葉を唯一理解できる弟。二人は周囲の人間関係からは距離を置き、兄は小鳥を眺め、小鳥を模したブローチを作り続け、弟は小鳥にまつわる本を読みふけり、小鳥の世話を続け、ひっそりと暮らす。言葉のいらぬコミュニケーションの尊さと可能性を感じさせてくれる。

## 『博士の愛した数式』

(新潮文庫)

数学と物語にかかると、「観察」という架け橋

に描かれる数学への感動が美しい。  
本書を読むと、著者が人や事象に注ぐまなざしの深さ、そして小川文学の源泉がよくわかる。

### 『物語の役割』

(ちくまプリマー新書)

◆ あなたのの中に隠れている物語をそっと教えてくれる

本書を読めば、物語を紡ぐことは、決して作家にのみ与えられた特権的な行為ではなく、誰しもが行っている、人間の根源的な行為だと理解できるだろう。誰の中にも、どんなところにも物語はある。それを見つけるコツは、少しだけ注意深く、少しだけ謙虚になること。短い本だが、人生を変えてしまいう一筋の光がきらめいている。

### 『深き心の底より』

(PHP文芸文庫)

◆ 涼子のもとに、恋人の弘之が自殺を図ったと連絡が入る。彼には何も変わらなかったころはなかった。だが、初めて知る彼の弟の存在、更にプロ顔負け

サスペンスと幻想が立ち込める、愛を解釈し直す物語

### 『凍りついた香り』

(幻冬舎文庫)

◆ 本書には、著者が30代の頃のエッセイが収録されている。多くの人にとって、30代とは、人生の重大事が次々と出来る忙しい年代だ。本書でも、執筆、出産、子育てなど、目まぐるしく過ぎず日々が綴られる。だが同時に、不思議なほど過去についても思いが馳せられている。タイトルの心の深き底とは、今と過去とが再会できる、静かな思索のことかもしれない。

◆ 30代という人生の岐路で、過去と未来を思うエッセイ

のスケート技術を持ち、世界大会に出場するほどの数学の天才だったことが明らかになっていく。一体彼は何者だったのか……。亡くした恋人を再び知るために、彼女は旅立つ。

### 『完璧な病室』

(中公文庫)

◆ 鮮烈なデビューを飾った最初期の名編たち

◆ 本書にはデビュー作を含めた初期の四篇が収められている。いずれも死の匂いが立ち込めるものばかりだが、不思議と暗さはなく、むしろ木洩れ日が射したようなほのかな温かさがある。それは以降の多くの小川洋子作品に共通する読後感だが、此岸に軸足を置きながら死を眺める眼差しは、後年とは異なる、みずみずしさを感じさせる。

### 『妊娠カレンダー』

(文春文庫)

◆ 悪意の潜む日記を盗み読みできる名作です!?

◆ 本作は第104回芥川賞を受賞した、著者の代表作の一つである。小川作品の中には、直接的な悪意が描かれることはまれだ。そんな中、本作は悪意を正面から描いた作品……と言える。楽なのだが、話はそう単純ではない。本作に描かれる「悪意」らしきものは、諦念、虚心、情愛、無邪気とも映り得る。淡々とした日記に隠されたその感情を見極める読書は、ゾクゾクすること間違いなし。

### 『小箱』

(朝日新聞出版)

◆ 喪失を理解してしまわないために

かつて幼稚園だった建物を住居にし

ている女性の描写から幕が開ける。彼女のもとを訪れるのは、発する声全てが見事な歌唱になってしまいうバリトンさん。暗示的で、静かな物語かと思いつつながら読み進めていくと、読者はあることに気がつく。この世界は、ある存在が喪われた後の世界なのだ。「喪失の哀しみ」という普遍のテーマを、見事に描き切った著者の到達点の一つ。

### 『対談集』

山極寿一

### 『ゴリラの森、言葉の海』

(新潮社「新潮文庫」刊行予定)

◆ 人間の観察は、ゴリラの観察のためにある

◆ 霊長類学者の山極寿一との対談集。山極先生によるゴリラの生態に関する解説に対して、小川さんが作家らしい観察眼で言葉を重ねていく。ゴリラはフクロウなど他の動物と遊ぶことがあるといふ山極先生の話に対して、弱く小さな生き物と遊べるということは共

◆ 『生きる』とは、自分の物語をつくること

(新潮文庫)

◆ 臨床心理の現場で、物語が役に立つ?

◆ 臨床心理学者の河合隼雄との対談。小川さんの物語観の根底を成すのは、人が現実を受け入れるためには、物語という形式が必要だという考え方である。それを実践しているのが、ほかならぬ臨床心理士である。河合さんも、自分の仕事は、患者が自分の物語を作る手助けをすることだと同意する。こんなところでも、物語は人々を助けてくれていることが分かる。

### 『科学の扉をノックする』

(集英社文庫)

文学的な感性を磨きつつ、科学の基礎知識が学べる

天文学者、鉱物学者、生物学者、更には遺体科学者に阪神のトレーニングコーチまで、様々な科学のスペシャリストに、小川さんがインタビュアーを試みる。なぜその分野に興味を持ったのかという作家の澄んだ観察眼が光る。専門家たちによる基礎からの丁寧な解説に満ち、文理の壁など軽々と越えた対話が息づく。

### 『そこに工場がある限り』

(集英社)

無口な職人の誠実な仕事ぶりは文学である

小川洋子の作品で重要な人物造形は「職人」だと思う。いたずらに個性を主張せず、自らの職分を守り、実直に仕事をこなす人々……。本書はそんな

な職人を小説として描くのではなく、実際に会いに行ってしまうエッセイ集である。ひたすらに穴だけを空ける職人や鉛筆職人など、個性的な職人が登場し、小川さんの誠実な文章が光る名編。

### 『ブラフマンの埋葬』

(講談社文庫)

最も残酷な小川洋子作品

芸術家たちのシェアハウスを管理する主人公は、ある日、奇妙な小動物を拾う。ブラフマンと名付けられたその動物は、はっきりとした正体こそ読者に明示されないが、特徴的な尻尾を持つていたり、四本脚だったり、毛むくじゅらで可愛らしい様子が描かれる。そんな庇護と信頼と芸術によって造られた世界は、小川作品随一の残酷さをはらんでいるように思う。

### 『猫を抱いて象と泳ぐ』

(文春文庫)

チェス盤の上で奏でられる一篇の純粋な詩

主人公は、幼い天才チェス・プレイヤー。彼の打つ手筋はあまりに美しいことから、盤上の詩人と呼ばれたアレクサンデル・アリオーヒンになぞらえて、リトル・アリオーヒンと呼ばれた。だが、やがて彼は大きくなることへの忌避感から、からくり人形の中に隠れてチェスを指すようになる。盤上の詩を紡ぐその隠れ家は、まるで堅固なシェルターのようなのである。

〈選書②〉

## 小川洋子の本棚

小川洋子さんは書籍やラジオで、たくさんの本を紹介されています。このコーナーでは、作家自身の言葉とともに、小川さんイチオシの本を並べています。

金井美恵子

### 『愛の生活・森のメリュジーヌ』

(講談社文芸文庫)

小川さんを創作に駆り立てる一冊

とにかく繰り返し繰り返し読めるのである。特別な小説は、絶対に飽きるということがないし、一行も一字も無駄がない。無造作に放り出されてからからと転がっている、不用な言葉が一

つもないのだ。

わたしにとってそういう特別な小説の筆頭は、金井美恵子さんの「愛の生活」だ。「小説を書きたくなる瞬間」

村上春樹

### 『中国行きのスロウ・ボート』

(中公文庫)

豊穡な早稲田大学出身者の系譜

村上春樹の小説の中で一番好きなのは、「午後の最後の芝生」だ。(中略)夏の陽射しの中で、淡々と芝生が刈られていって、ふと気がつく、胸の深いところにきしみが残っている。それを消す方法を、誰も知らない。

(『村上春樹とカーヴァーの瞳』)

岡ノ谷一夫

### 『つながり』の進化生物学』

(朝日出版社)

『ことり』が書かれるキッカケとなった生物学の名著

あるいは岡ノ谷先生の言葉を借りて進化生物学的に言うならば、いい小説を読むと、自分の遺伝子の中に残っている、言葉を話す以前の、進化の分かれ道に立つ以前の人間の記憶が呼び覚まされるんじゃないか。言葉を持っていなかった自分に戻れる。それを人は「感動」と呼ぶんじゃないか、と。小説を書いていると、それを実感します。

『小説の生まれる場所』

ダニロ・キシユ（山崎佳代子訳）

『若き日の哀しみ』

（創元ライブラリ）

小川洋子が小説を書き続けている理由がここにある

この本は本当によく手に取ります。そうすると、私は「この子を守るようではなくてはいけない」と思うんです。か弱い子どもたちにはとても共感します。その気持は私が書くころとまったく最初のきっかけでもあり、書き続けている理由でもあります。守ることというのは、とても文学的なおこないだと思います。

『世界のジャーナリズムが注目した小川洋子の文学』

原民喜

『夏の花・心願の国』

（新潮文庫）

戦争の影を生き、書き続けた作家の声なき叫び

妻を病で亡くし、孤独の中で原爆に遭った原の創作の礎には、いつも死者たちの無言があった。広場の真ん中に立ち、社会に向かって大きな声で物申すのではなく、言葉を奪われた者の声なき声を言葉にする、という矛盾に黙々と耐えた作家、詩人だった。

（『死者の声を運ぶ小舟』）

中沢けい

『海を感じる時・水平線にて』

（講談社文芸文庫）

小川さんにとって、思春期の次を表現してくれた作品

妊娠したかも知れないと動揺した主人公が、生理がきた時の感触を「小さな蛇が逃げだした。岩の割れ目から今を待っていたように、鋭い体をくねら

せ、出てきた」と表現しています。ここを読んだ時、ひっくり返るほどの衝撃を受けました。これが文学なのか！と。

（『洋子さんの本棚』）

藤原正彦

『天才の栄光と挫折』

（文春文庫）

小説家、数学に出会う

古今東西九人の天才数学者たちの素顔を、同業者の温かい視点で描いた本だが、これを読めば、数学が嫌いな人でも、数学者のことは好きになってしまうに違いない。輝かしい数学的才能と引き換えに、彼らがどれほど深い苦悩を背負っていたか、胸に痛いほど伝わってくる。

（『天才数学者の悲しい恋』）

岸本佐知子

『気になる部分』（白水ロブックス）

『ねにもつタイプ』（ちくま文庫）

名翻訳家の根っこをたどる

私にとってなくてはならない本で、折に触れ手に取り、読み返している。（……）岸本さんのエッセーの魅力は、この二つのタイトルにすべて凝縮されていると言ってもいい。ねにもつタイプ特有の粘り強さにより、気になる部分にひたすらこだわり続け、凡人には思いも及ばない特異な世界を見出す。

（『ねにもつ部分』）

アンネ・フランク（深町眞理子訳）

『アンネの日記』増補新訂版

（文春文庫）

作家・小川洋子を育んだ日記文学

『アンネの日記』ほど私に多くの事柄を教えてくれた本はない。戦争、差別

のこと。家族との葛藤、初恋、性。そしてものを書く素晴らしさ。ペンと紙が一枚あれば、たとえ密告や空襲におびえる隠れ家の中にあっても、かけがえない自由を得られる、ということ。

（『本はいつでも寄り添ってくれる』）

ボリス・ヴィアン（伊東守男訳）

『うたかたの日々』

（ハヤカワepi文庫）

予定調和的な小説に飽きたあなたへ

普通、リアリティがあるということ、小説にとって誉め言葉なのですが、この作品はそういう安っぽい賛辞を求めています。現実と妄想の壁を取り払って、辞書にのっている言葉の意味も飛び越えて、それこそ『うたかたの日々』だけの世界を構築しています。

（『心と響き合う読書案内』）

リチャード・ブローティガン（藤本和子訳）

『西瓜糖の日々』

（河出文庫）

すべてが西瓜糖によってできた世界で

つねに机の脇に置いてあるのが、リチャード・ブローティガンの『西瓜糖の日々』。これは私がデビューした時に担当してくれた編集者がプレゼントしてくれたもので、カバーも可愛らしくて素敵なお本。本って、傍らに置いてアルバムのように時々開いて、慈しむものなんですよ。誰から贈られたかも含めて、人生で重要な役割を果たす品物ではないかと思えます。

（『作家の読書道』）

『小川洋子と読む内田百閒アンソロジー』

（ちくま文庫）

日本屈指のユーモア作家の多面性を知る

ポール・オースター (柴田元幸訳)  
『偶然の音楽』

(新潮文庫)

巨額の遺産を手にした男の全米旅行

オースターの小説を考える時、偶然という要素はどうしても外せないが、彼はそれを必然的な生死の対極にあるものとしてとらえている。理論や化学や法律でうまく取り纏われているようでありながら、実は人生の大半は理由のつかない偶発的な出来事によって形成されている。彼はその不可思議の奥に、真の物語を掘り起こそうとしている。

『偶然の音楽』解説

内田百閒もブローティガンも尾崎翠も、本箱へしまわれることなく、常にワープロのそばに置かれている。小説を書いてどうしようもなく疲れた時、どれか一冊を手に取り、ばらばらとめくって適当な数行を読む。すると何かが私の中に響いてきて、書くために必要なエネルギーが補給される。

『仕事の周辺』

川端康成

『眠れる美女』

(新潮文庫)

世界に羽ばたく日本文学者の系譜

私がいちばん好きな作家は川端康成です。人間のもっている、本当は隠したい嫌らしさを書いて、それを美と醜の極地の域にまで到達させた作家で、繰り返し読んでいます。

『小川洋子のつくり方』

〈選書③〉

## 小川洋子を通して世界を広げてみる

私は、高校生の頃に、小川洋子さんの本に触れたことをきっかけに文学部へ進学し、今でも文学を信じ、読み続けています。小川さんに導かれるようにして、少なくとも本を読んできた中で思うは、小川さんの世界をきちんと理解しようとする、文学という大きくて、長い営みについて考えざるを得ない、いや考えられることでした。

そこで、ここでは、私が小川さんの作品世界と相性が良いと感じたものを紹介しています。本書を繙けば、小川文学がより立体的になり、ひいては文学全体に目配りができることでしょう。

柳美里

『JR上野駅公園口』

(河出文庫)

声なき声に耳を傾けることの尊さと困難さ

主人公は上野駅で暮らすホームレスの男性。国家から、地域から、言葉から疎外されている彼は、何事もできず、ただ人々のざわめきに耳を澄ませているだけ。身近にたくさんの声なき声があることに我々は気づかないでいるが、その大切さと同時に、声なき声に耳を傾けることの困難さを綺麗事抜きで描き切る。全米図書賞受賞作。

宮本輝

『錦繡』

(新潮文庫)

手紙の往復で十年前を生き直す

十年前に離婚した元夫婦の手紙に

よって綴られる書簡体小説。彼らはひよんなことから再会し、それからぼつぼつと手紙を交わすようになる。メールと違って、執筆にも送付にも返信にも、多大な時間と労力を要する手紙をやりとりすることは、時間を交わすこともかもしれない。だからこそ彼らは錦を織るように、十年前の時を再び編みなおすのである。

◆

### 『アーカイブの思想』

(みすず書房)

小川文学のキーワード「図鑑・図書館・博物館」を知るために

小川文学には、図鑑や博物館といった何かが蓄積された本や空間がよく登場する。本書はそんな知の収集や整理に関する格好の入門書である。西洋を中心に、古代の図書館から大学のカリキュラムや現代の検索エンジンまでの歴史を鮮やかに論じる。読めば、そ

の偉大さと神秘さが分かり、小川作品の見え方も変わるはず。

◆

ランディ・オルソン(坪子珪美訳)『なぜ科学はストーリーを必要としているのか』

(慶応義塾大学出版会)

人が世界を理解するフォーマットとしての物語

小川洋子『物語の役割』では、人間は世界を理解するために、物語という形式を用いる、という論が展開される。それと近いテーマを、より理論的に説いたのが本書だ。生物学の博士号を取得後、ハリウッドで映画製作者となった著者は、様々な理論や例を駆使し、現実理解のフォーマットとしての物語を説く。物語の射程は実に広い。

◆

ヴァージニア・ウルフ(森山恵訳)

(早川書房)

### 『波』

見えない存在や繋がりを丹念に追うこと

小川洋子に似ている作家の一人は、ヴァージニア・ウルフではないかと思う。両者に共通する、生者と死者を分け隔てない姿勢は、世界が私たちだけではなく、死者などインヴィジブルな存在によっても統御されていることを思い起させてくれる。本書は登場人物たちの切断や不在によって物語が駆動しており、見えないものを追う忍耐と謙虚さが求められる傑作だ。

◆

俵万智

### 『未来のサイズ』

(KADOKAWA)

降る雪のしんしん思索する君のルートの時間、コペルの時間

歌人・俵万智の第六歌集。『サラダ記念日』以来、次々と短歌に新風を巻

き起こしてきた彼女は、本歌集によって、歌壇で最も権威ある逍空賞を受賞した。コロナ禍、移住、息子など、多彩なテーマによって彩られており、その中には『博士の愛した数式』にまつわる歌もある。「しんしん」という表現が、作品世界と読書とを静かに繋ぐ名歌である。

◆

小林秀雄・岡潔

(新潮文庫)

### 『人間の建設』

人生の秘訣は、個性を殺すことである

批評家・小林秀雄と、世界を代表する数学者・岡潔との対話である。「酒の味からインシュタインまで」テーマは多岐にわたるが、通底しているのは、己の個性を分別なく発露することへの警鐘である。それは、小川洋子の創作態度とも大いに通ずるし、人生の極意といっても大袈裟ではないだろう。冒頭で五山の送り火を批判してい

る意図がわかれば、大枠は理解したといえるはず。

◆

新井紀子

### 『数学は言葉』

(東京図書)

数学を言葉として捉えられるようになる

『博士の愛した数式』は、数学がいかにチャームングで、人間的な営みかということを教えてくれた。そのまなざしでより深く数学に向き合いたい人にオススメするのが本書だ。数式という言葉で世界を読むという理念に貫かれており、数文和訳、和文数訳などを通して、数学の文法・語法がわかる。

◆

小川公代

### 『ケアの倫理とエンパワメント』

(講談社)

文学とケアを通して、「愛」について

真剣に考える

近年、様々な分野で言及されることが多い「ケア」。その要諦の一つは、生きることについて、「自立」ではなく、「共存」や「依存」の価値を重視した点にある。本書は、そんなケアをキーワードに文学作品を読みなおす一冊。膨大だが丁寧な文学読解が軸になっているため、少し文学に読み慣れた人が、読解の実践を学ぶのにも最適。

◆

須賀敦子

### 『ミラノ 霧の風景(須賀敦子全集1)』

(河出文庫)

ヨーロッパ文学仕込みの静謐な文章から知性が薫る

イタリアを軸にした比較文学者による随筆である。須賀敦子の文章は、大袈裟なことや劇的なことはほとんど描かれない。まるでレンガを一つ一つ積

み上げるように地道で丹念な文章だ。だが、読み終える頃には、そのレンガが組み合い、一つの大きな伽藍がそびえている。敬虔な祈りを捧げるような、静かな読書が約束されている。

◆ ルイーズ・グリユック (野中美峰訳)  
『野生のアイリス』

(KADOKAWA)

◆ 二〇二〇年ノーベル文学賞を受賞した詩人の代表作

グリユックの作品には、厳しさと謙虚さが静かに湛えられている。「芸術は、すべての人に一律に役立つようなサービスではない」という彼女の言葉は、詩が安易な有益性からは隔てられており、安直に理解できるものではないことを強調すると同時に、その言葉が必要な人にとっては必ず染み渡ることが暗示されている。

◆ W・K・ハイゼンベルク (山崎和夫訳)  
『部分と全体』

(みすず書房)

◆ 科学が世界全体の捉え方であり、思想だった時代

◆ ノーベル物理学賞を受賞した科学者による自伝。約五十年に亘る様々な対話を軸としており、中にはニールス・ボーアやアインシュタインなど、様々な科学者が登場する。特に、ドイツ人科学者として、第二次世界大戦の敗戦を迎えた著者の内省は必読。

◆ 村上陽一郎

◆ 『科学・技術の二〇〇年をたどりなおす』

(NTT出版)

◆ 科学と技術が当たり前になった現代に必読の一冊

◆ 十九〜二十世紀の科学と技術の歴史

◆ ねる

◆ 人はなぜ言葉を使うようになったのかという問いと同様、なぜ数を生み出したのかは、人間を考える上での根源的な問いである。本書では様々な言語における数の表現、数の操作の様々な例を挙げる。更に、数を持たないピタハシ族の話、数を認知していると思われた動物の話など、様々な観点から数を考える。

◆ 高松寿夫

◆ 『柿本人麻呂 (コレクション日本歌人選)』

(笠間書院)

◆ 和歌という言葉と心の大河に竿をさすために

◆ 「コレクション日本歌人選」は、八十冊に渡り、テーマや歌人ごとに詩歌の紹介がなされている名シリーズである。基本的には、見開きで一首の歌が解説されており、基本事項の解説や現

を、わずか二百五十ページで一挙に総覧できる一冊。主となるのは物理学史、生物学史、情報史であり、それらについて社会制度や科学哲学の観点を織り交ぜながら、多角的な解説がなされる。これで十分とは言わないが、それでもこれくらいを知っておくと、世界へのまなざしが変わるだろう。

◆ 石田勇治

◆ 『ヒトラーとナチ・ドイツ』

(講談社現代新書)

◆ 合意独裁までの道筋を追体験する

◆ ドイツ近現代史の権威による、行き届いたナチスの概説書。ヒトラーの生い立ちからヒトラー政権の成立期、ナチ体制による政治、そしてホロコーストまで、丹念に解説が施される。特にヒトラー政権成立から独裁体制成立のわずか一年半までの記述は、読み手が当日のドイツ国民の感情を追体験できるようで、貴重である。

◆ アルフレッド・W・クロスビー (小沢千恵子訳)  
『数量化革命』

(紀伊國屋書店)

◆ 数を制した者が、世界を制す

◆ 中世後期からルネサンス期にかけて、西ヨーロッパでは世界を変える大きな発明がなされた。それは、事物や事象を数量的に捉える思考方法によってもたらされた。結果、天文学や航海術、工学などが発達し、後のヨーロッパによる帝国主義を促した要因の一つとなった。本書は、そんな数量化という手段を手にした時代を縦横無尽に論じる、知的刺激満載の一冊。

◆ ケレイブ・エヴェレット (屋代通子訳)

◆ 『数の発明』

(みすず書房)

◆ 時に言葉より雄弁な数の根源をたず

◆ 代語訳も網羅されていて、とても読みやすい。今回は、小川さんもイチョシの万葉歌人柿本人麻呂の巻をチョイスした。

◆ 天の海に雲の波たち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ

◆ 朝永振一郎

◆ 『量子力学と私』

(岩波文庫)

◆ 物理学の発見を、科学者の交流や半生から通時的に読む

◆ 朝永は、湯川秀樹に続いて、日本人で二人目のノーベル物理学賞の受賞者である。本書では、湯川秀樹との切磋琢磨やハイゼンベルクとの運命的な出会いなど、物理学の発見がいかに人間臭い営みや葛藤の中から産み落とされていたかがよくわかる。巻末の解説もあわせて読むことで、物理学に関する基本も身につくこと請け合い。



『小川洋子のつくり方』ブックフェア 選書リスト

区分	No.	著者名	タイトル	出版社名
① 小川洋子の作品たち	1	田畑書店編集部	小川洋子のつくり方	田畑書店
	2	小川洋子	密やかな結晶	講談社文庫
	3	小川洋子	アンネ・フランクの記憶	角川文庫
	4	小川洋子	やさしい訴え	文春文庫
	5	小川洋子	琥珀のまたたき	講談社文庫
	6	小川洋子	ことり	朝日文庫
	7	小川洋子	博士の愛した数式	新潮文庫
	8	小川洋子	物語の役割	ちくまプリマー新書
	9	小川洋子	深き心の底より	PHP文芸文庫
	10	小川洋子	凍りついた香り	幻冬舎文庫
	11	小川洋子	完璧な病室	中公文庫
	12	小川洋子	妊娠カレンダー	文春文庫
	13	小川洋子	小箱	朝日新聞出版
	14	小川洋子	ブラフマンの埋葬	講談社文庫
	15	小川洋子	猫を抱いて象と泳ぐ	文春文庫
	16	小川洋子/河合隼雄	生きるとは、自分の物語をつくること	新潮文庫
	17	小川洋子/山極寿一	ゴリラの森、言葉の海	新潮社（※近日、新潮文庫）
	18	小川洋子	科学の扉をノックする	集英社文庫
	19	小川洋子	そこに工場がある限り	集英社
② 小川洋子の本棚	20	金井美恵子	愛の生活・森のメロジュエヌ	講談社文芸文庫
	21	村上春樹	中国行きのスロウ・ボート	中公文庫
	22	岡ノ谷一夫	「つながり」の進化生物学	朝日出版社
	23	ダニロ・キシユ	若き日の哀しみ	創元ライブラリ
	24	摩民喜	夏の花・心願の国	新潮文庫
	25	中沢けい	海を感じる時・水平線にて	講談社文芸文庫
	26	藤原正彦	天才の栄光と挫折	文春文庫
	27	岸本佐知子	気になる部分	白水uブックス
	28	岸本佐知子	ねにもつタイプ	ちくま文庫
	29	アンネ・フランク	増補新訂版 アンネの日記	文春文庫
	30	ボリス・ヴィアン	うたかたの日々	ハヤカワepi文庫
	31	リチャード・ブローティガン	西瓜糖の日々	河出文庫
	32	小川洋子、内田百閒	小川洋子と読む 内田百閒アンソロジー	ちくま文庫
	33	川端康成	眠れる美女	新潮文庫
	34	ポール・オースター	偶然の音楽	新潮文庫
③ 小川洋子を通して世界を広げてみる	35	柳美里	JR上野駅公園口	河出文庫
	36	宮本輝	錦織	新潮文庫
	37	根本彰	アーカイブの思想	みすず書房
	38	ランディ・オルソン	なぜ科学はストーリーを必要としているのか	慶応義塾大学出版会
	39	ヴァージニア・ウルフ	波	早川書房
	40	依方智	未来のサイズ	KADOKAWA
	41	小林秀雄・岡潔	人間の建設	新潮文庫
	42	新井紀子	数学は言葉	東京図書
	43	小川公代	ケアの倫理とエンパワメント	講談社文庫
	44	須賀敦子	須賀敦子全集 1	河出文庫
	45	ルイズ・グリュック	野生のアイリス	KADOKAWA
	46	ハイゼンベルグ	部分と全体	みすず書房
	47	村上陽一郎	科学・技術の二〇〇年をたどりなおす	NTT出版
	48	石田勇治	ヒトラーとナチ・ドイツ	講談社現代新書
	49	アルフレッド・W・クロスビー	数理化革命	紀伊国屋書店
	50	ケイレブ・エヴェレット	数の発明	みすず書房
51	高松寿夫	柿本人麻呂(コレクション日本歌人選)	笠間書院	
52	朝永振一郎	量子力学と私	岩波文庫	
53	三木成夫	胎児の世界	中公新書	
54	高山宏	夢十夜を十夜で	羽鳥書店	

三木成夫  
『胎児の世界』

(中公新書)

身体をタイムマシンとして悠久の時を  
さかのぼる

「個体発生は系統発生を繰り返す」とは、今では批判も多い反復説のテーゼだが、本書は我々の身体に眠る悠久の記憶を辿る、稀有壮大な生物論である。文豪ゲーテとヤツメウナギから、生命の根源を尋ねる記述は感動すら覚える。

高山宏

『夢十夜を十夜で』

(はとり文庫)

縦横無尽な知識で漱石を解説する

文学の読み方には様々な方法がある。本書でなされるのは、美術、心理

学、神学、歴史、哲学など膨大な学識を武器に、作品に隠された意味をあぶりだす剛腕の手法だ。まるで感動すら覚えるスピード感で疾走し、読み終わる頃にはすっかり高山学の虜だらう。

### 渡辺祐真（スケザネ）

1992年、東京都生まれ。東京のゲーム会社でシナリオライターとして働く傍ら、文筆家、書評家、書評系YouTuberとして活動。ラジオ、トークイベントにも多数出演。執筆記事に、「本棚がイギリスの麦畑に思えたとき」（幻冬舎 plus）、「俵万智の全歌集を「徹底的に読む」（『短歌研究 2021年6月号』）、「推し」て、知るべし——三溪・原富太郎に学ぶ「推し」の美学」（『月刊経団連 2021年10月号』）、連載「純喫茶で名文を」（ポータルサイト「ケムール」）などがある。

YouTubeチャンネル「スケザネ図書館」では、書評や書店の探訪、ゲストとの対談など、多数の動画を展開している。

翻訳家 Emily Balistreri のアシスタントとして、森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』（“The Night Is Short, Walk on Girl”）などの翻訳を手掛けた。

〈好きな作家〉伊勢、ヴァージニア・ウルフ、小川洋子、北杜夫、葛原妙子、小林秀雄、西行、須賀敦子、俵万智、ダンテ、辻村深月、ネルヴァル、平野啓一郎、ピンチョン、E.M. フォースター、ペソア、水原紫苑、森見登美彦、李商隠

〈好きな漫画家〉浦沢直樹、近藤ようこ、山岸涼子、山口つばさ、よしながふみ

〈好きな音楽家〉久米小百合（久保田早紀）、椎名林檎、すぎやまこういち、アート・テイタム、ハシッド

〈好きな画家〉小林古径、東山魁夷、モランディ

〈好きな芸能人〉渥美清、唐沢寿明、岸恵子、佐久間宣行、高峰秀子、ファーストサマーウイカ、中村伸郎、水谷豊

○ Twitter：@yumawata33

小川文学の軌跡とこれから  
ブックフェア・ガイドブック

二〇二二年十月七日 発行

著者 渡辺祐真（スケザネ）

発行人 大槻慎二

発行所 株式会社 田畑書店

〒一〇二一〇〇七四

東京都千代田区九段南三二一―二

森ビル5階

印刷・製本・デザイン

田畑書店デザイン室

（非売品）